

本市の全国学力・学習状況調査結果概要（報告）

平成26年10月3日
由利本荘市教育委員会

本調査の目的は、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から各地域における児童生徒の学力や学習状況をきめ細かく把握・分析し、その成果を検証して学習指導の改善を図ることなどであり、平成19年度から文部科学省が実施しているものです。今年度の調査は悉皆で行われましたが、本市では小学校15校、中学校11校が参加し、4月22日に実施されました。（小学6年生約650名、中学3年生約700名）。

調査内容は、国語、算数・数学の2教科で、主として「知識」に関する調査問題Aと、主として「活用」に関する調査問題Bの2種類、小学校と中学校で合計4種類実施されました。その他に、学習習慣や生活習慣等に関する児童生徒質問紙調査と、主に校長が回答する教育環境に関する学校質問紙調査も実施されました。

さて、本市では各校における課題への迅速な対応に資するために、市学力対策委員会の採点委員会にて採点しております。この報告は、文部科学省提供の全国のデータと市学力対策委員会が採点・分析した全小・中学校のデータに基づくものです。

調査結果の概要については、小・中学校の平均正答率において、本市は国語、算数・数学とも全国平均を上回り、本県の7年連続全国1位及びトップクラスの成績に貢献しました。このことから、本市の児童生徒の学力の状況は概ね良好なものと判断できます。特に、小学校においては、全教科の正答率が県平均を上回る結果であることは成果としてあげることができます。活用に関するB問題についても、小学校では伸びを示しており、これまでの結果を受けた取組の成果が現れつつあります。一方、中学校においては、課題解決のために構想し自分の考えを的確に他者に伝えるために必要な思考力や表現力等の育成については、今後も指導方法や指導内容について、なお一層研究し授業改善を進める必要があります。

質問紙調査の概要については、本市の児童生徒は、全国と比較すると夢や目標をもって生活している姿勢がうかがえます。一方、学校の授業時間以外の勉強に2時間以上じっくり取り組んでいる児童生徒の割合が全国に比べて少なく、テレビゲームを2時間以上している中学生の割合が高い状況にあります。テレビゲーム、携帯電話・スマートフォン等の使用や放課後のスポーツ少年団活動・部活動、家庭学習、テレビ視聴等の娯楽、睡眠等の時間の使い方について、児童生徒が適切に判断できるよう、学校や家庭、地域や教育委員会が連携して、子どもの「自律」を育てていく必要があります。

今回の調査結果から、本市の児童生徒は、基礎的・基本的な学力と規則正しい生活習慣等が概ね身に付いていることが確認できました。平成27年度の調査については、国語、算数・数学に理科が加わり、3教科について悉皆により実施されます。理科については、小学6年生で参加した児童が中学3年生になり、どのような変容・成長が見られたかなどの経年による比較・分析も視野に入れ、各教科において指導方法の工夫改善を一層図ることが必要と考えております。

今後も、確かな学力を身に付け、自信をもって表現できる力、将来の夢の実現に向かって粘り強く努力し続ける力の育成に邁進して参りたいと考えております。

【資料】 全国及び秋田県の平均正答率一覧

〈小学6年 平均正答率〉

	国語A	国語B	算数A	算数B
秋田県	77.4	67.3	85.1	66.2
全国	72.9	55.5	78.1	58.2

〈中学3年 平均正答率〉

	国語A	国語B	数学A	数学B
秋田県	84.4	55.8	73.0	65.5
全国	79.4	51.0	67.4	59.8

小学校国語について

国語A「主として知識に関する問題」の結果

領域ごとの調査結果については、全国と比較すると3領域1事項とも高い平均正答率を示しています。特に、「書くこと」においては、全国より8ポイント程度上回るなど高い正答率を示しています。

低学年から発達段階に応じて、語句の意味を正しく捉え、文や文章を論理的に整えて書く力を高める指導を工夫している学校が多く見られます。ことわざや故事成語の理解については、依然として課題が見られますので、指導を一層充実させることが必要です。

【登場人物の人物像や相互関係を説明する】

物語の登場人物の相互関係を捉えることに若干課題が見られました。第3学年以上では「登場人物の人物像を捉えること」、第5学年以上では「登場人物の相互関係を明確にすること」をねらいとした指導が求められます。叙述を基に人物の性格について話し合う活動や、相互関係をカードや矢印などを操作して関係図に表して説明し合う活動を充実させることが大事です。

国語B「主として活用に関する問題」の結果

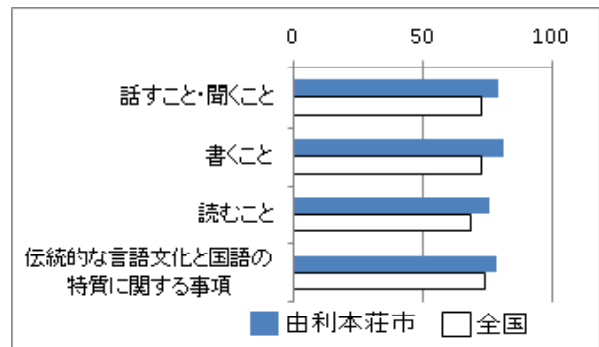
領域ごとの調査結果については、全国と比較すると3領域1事項とも高い平均正答率を示しています。特に「書くこと」と「読むこと」においては、全国より13ポイント程度上回るなど高い正答率を示しています。

昨年度課題であった「複数の文章を比べて読み、表現の工夫を捉える」についても無解答率が下がり、各学年での指導が確実に行われていることが結果として現れています。「立場を明確にして意見を述べる」には課題が見られましたので、確実な定着を図る指導が必要です。

【相手の発言を引用して意見を述べる】

「立場を明確にして意見を述べる」は全国的に平均正答率が低く、本市も同様でした。相手の主張を踏まえて意見を述べるためには、的確に受け止め、正しく引用して話すことが大切です。原文や友達の話引用して自らの論理展開につなげる学習活動を、発達段階に応じて意図的・計画的に組み入れて指導することが大事です。

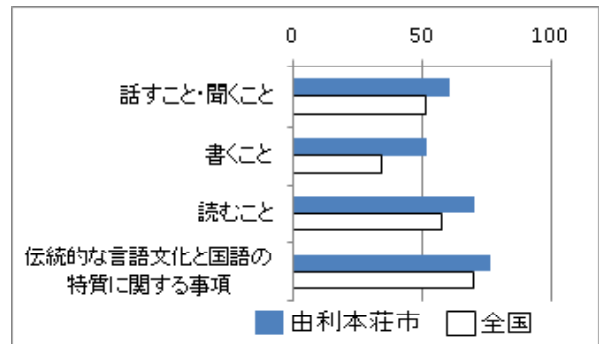
<小学校 国語A（領域）の正答率>



【故事成語を理解し実生活で活用する】

「ことわざや慣用句、故事成語などの意味や使い方を正しく理解し用いる」については今年度の調査結果においても課題が見られました。故事成語については、意味や使い方を授業で確実に指導するとともに、実生活の中で活用できるように、朝や帰りの会での「故事成語を使った1分間スピーチ」や故事成語を使って日記を書く活動など、計画的に指導することが重要です。

<小学校 国語B（領域）の正答率>



【分かったことを条件に応じて書く】

情報は取り出しているものの、解答に必要な条件である「二文を一文にする」、「『例えば』を使う」部分に課題が見られました。

「目的に応じて必要となる情報を取り出し、それらに関連付けて読む」ために、構成や記述について、必要な条件を与えたり、教師がモデルを示したりしてまとまった文章を書くように指導することが大切です。

質問紙調査から<国語の学習について>

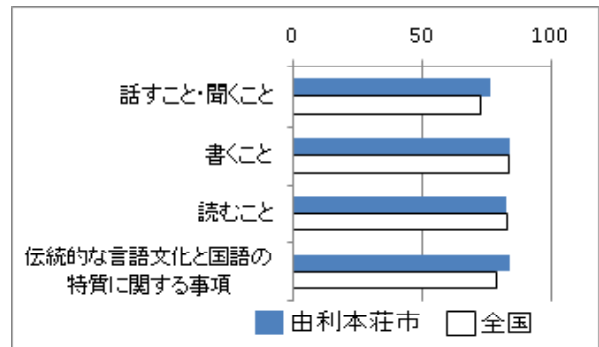
「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」という質問に対して「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた児童は、全国よりも16ポイント上回っています。「国語の勉強は好きだ」が全国比+9ポイントであることも併せて、自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりする活動が日常的に行われるなど、児童の興味、関心を大切にしたい授業が実践されていることがうかがえます。

中学校国語について

国語A「主として知識に関する問題」の結果

領域ごとの調査結果については、すべてにおいて全国を上回る平均正答率を示しています。特に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、「漢字を正しく書く」出題において、全国より10ポイント程度上回る結果となっており、昨年度同様に小学校で学んだ配当漢字を日常生活の中で定着させる指導が行われていることが分かります。「書くこと」と「読むこと」においては、一部に課題が見られますので、今後の指導の充実が求められます。

<中学校 国語A（領域）の正答率>



【書いた文章を推敲する】

「叙述の仕方などを確かめて、適切に書き換える」について課題が見られました。

「書くこと」の単元における書いた文章を推敲する指導では、主語と述語の関係や修飾語・被修飾語の関係など文の構成や接続の仕方について、実際に書き換えてその効果を実感させることが効果的です。

【文脈に即して語句の意味を理解する】

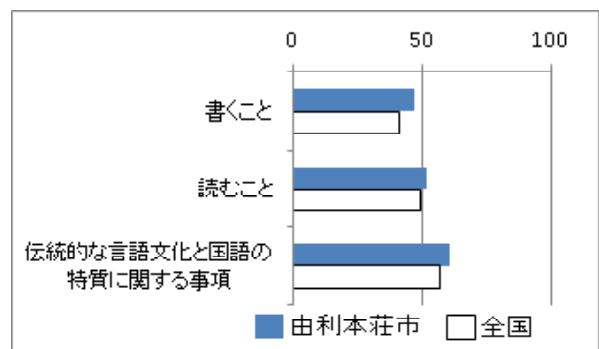
「抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読む」について課題が見られました。説明的な文章を読む際には、内容の大体を捉えるために、抽象的な概念を表す語句や、それと対応している具体的な内容を取り上げて、その関係性を図表に整理するなどの学習活動が効果的です。

国語B「主として活用に関する問題」の結果

領域ごとの調査結果については、2領域1事項とも全国を上回る平均正答率を示しています。記述式問題の平均正答率が全国より高く、すべての問題で無解答率が全国より低いことから、条件に応じて思考を整理して書く力を高める指導が定着してきていることが分かります。

今後の指導にあたっては、文章や資料から必要な情報を取り出し、内容を正しく理解した上で活用する指導の充実が求められます。

<中学校 国語B（領域）の正答率>



【資料から情報を得て自分の考えを書く】

「資料から適切な情報を取り出し、伝えたい事柄が明確に伝わるように書く」は全国同様に本市でも課題が見られました。教科書教材だけでなく、新聞や論説文等を活用して、必要な情報を取り出して他の人に向けて説明する言語活動を設定するなどの指導の充実が求められます。

【作者のメッセージを豊かに想像する】

「作者のものの見方や考え方について自分の考えをもつ」に課題が見られました。短い言葉に込められた作者のメッセージを捉えるためには、表現の工夫や効果について感想をもち、その交流を通して、実際に感想文を書いたりして作者の思いを豊かに想像させる指導が必要です。

質問紙調査から<国語の学習について>

「国語の勉強は好きだ」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と答えた生徒は、全国よりも5ポイント程度上回っています。また、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしている」という質問についても全国よりも18ポイント程度上回っています。それぞれの各領域・事項の指導において、ねらいに応じた言語活動が設定され、実生活に生きる国語の力を高める指導が行われるよう、今後もこれまでと同様に、十分な教材研究のもとで積極的に発信する国語の授業実践が望まれます。

小学校算数について

算数A「主として知識に関する問題」の結果

領域ごとの調査結果については、すべて全国の平均正答率よりも高い数値を示しています。特に、「数量関係」領域においては、全国よりも10ポイント以上高い正答率です。また、「数と計算」領域の小問によっては、県平均を大きく上回る結果を示すなど格段の成果が見られます。

今後の指導に当たっては、特に、図形領域について、作図の手順と図形の約束等を関連付けて理解するなど、知識・理解の習得という視点での指導の強化・工夫改善が必要です。

【乗法の意味】

図に示された数量の関係を読み取り、比較量を求めるために乗法が用いられていることへの理解が十分になされています。特に、小数倍の場合への対応も十分できていることは、ノート指導を核としたこれまでの図や数直線図を用いて根拠を明らかにして説明する活動を多く取り入れた継続的な指導が実を結んだものと考えます。

算数B「主として活用に関する問題」の結果

全領域において全国よりも高く、県と同程度の平均正答率を示しています。しかし、示された情報や条件を基に比較したり、判断したりすることについて課題が残ります。特に、「図形」領域においては、昨年と比べ全体的な改善は見られるものの、数学的な考えを基にして説明することについてはまだまだ不十分です。

今後の指導に当たっては、問題解決に用いる情報を整理し、それらを組み合わせる活動を意識的に取り入れることにより指導の充実を図ることが大切です。

【情報の整理・選択と判断の根拠の説明】

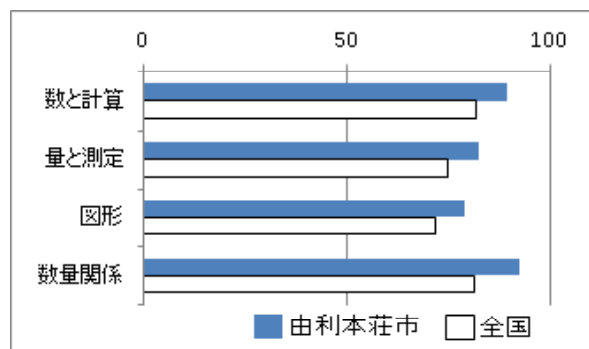
日常の事象を数理的に捉え、条件に合う時間を求めたり、数の相対的な大きさを図によって捉えたりする力が十分身についています。さらに、図を基に情報を整理し、量の大小などを判断する根拠や理由について数学的に表現することができるよう、算数科における言語活動の充実を図る学習指導の日常化が克服のポイントになります。

質問紙調査から〈算数の学習について〉

算数の学習の仕方については、ほとんどの項目において、選択番号1(当てはまる)、2(どちらかといえば当てはまる)の合計が、県と同程度で全国を上回るよい傾向が見られます。特に、「普段の生活の中で活用できないか考える」、「最後まで解答を書こうとした」の割合は高くよい結果を示しています。しかし、全体的に選択番号「1」の割合が県よりも低く、特に、「算数の勉強は好きですか」の項目については、「好き」の「1の割合」が県よりも低く全国と同程度の結果です。

今後は、算数的活動を通して見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさ等、算数の有用感とともに必要感と実感が伴った指導の工夫が必要です。

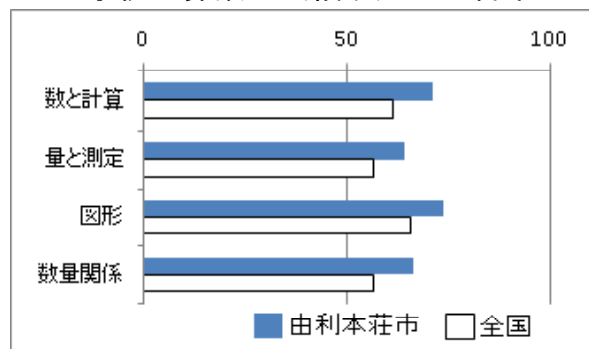
〈小学校 算数A（領域）の正答率〉



【円周、平行四辺形の作図】

円周の長さを、直径の長さを用いて求めることや図形の約束や性質を用いて作図することについて課題が残ります。単に公式や作図の手順を形式的に指導するのではなく、必要とする部分に色づけして明確にしたり、作図の根拠となる図形の約束や性質について確認したりしながら、段階を追った丁寧な指導が必要です。

〈小学校 算数B（領域）の正答率〉



【事象の数学的な解釈と表現】

「数と計算」領域において、示された事象を観察し、繰り返し出現する事象の規則性を読み取り、数学的に表現することについて成果が見られます。「数量関係」の領域においても、変化や対応の関係を表やグラフを基に合理的・能率的に問題を解決する活動を多く取り入れ、算数のよさが実感できる指導の工夫が必要です。

中学校数学について

数学A「主として知識に関する問題」の結果

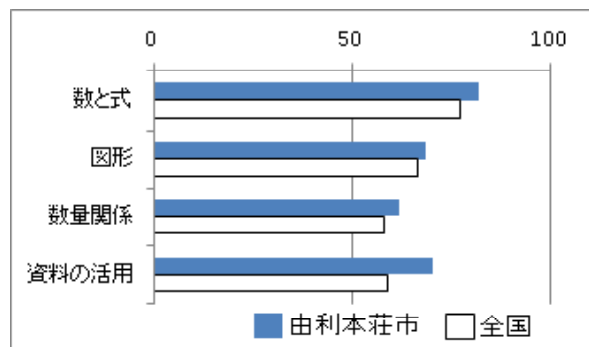
領域ごとの調査結果については、全領域において全国より高い平均正答率を示しています。しかし、「図形」、「数量関係」領域においては、70%に満たない平均正答率であり、特に「数学的な技能」の観点について課題があります。

今後の指導に当たっては、図形の性質や関数の表・式・グラフなどの活用場面において、根拠を明らかにして数学的に説明する活動を多く取り入れ、それらの「用い方」についても具体的に指導することが必要です。

【証明の方針の必要性と意味】

証明のための構想や方針の必要性と意味についての理解が不十分です。結論を示すために何が分かればよいか、仮定からいえることは何か、あと何が分かればよいかなどを考える場面を設定しながら、逆に、証明の根拠として用いられている図形の性質を確認するような指導も行うなど、双方向からの指導が大切です。

<中学校 数学A（領域）の正答率>



【確率の意味と求め方】

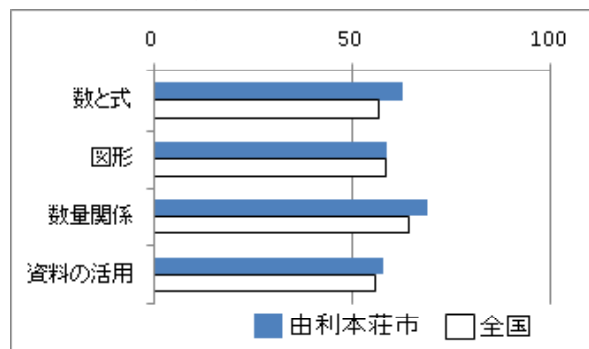
簡単な場合について、確率を求めるだけでなく、確率の意味を理解し判断できることが大切です。実験を通して体験的に考察し、実感が伴う形で理解できるような指導によって、定着を図ることが必要です。また、予想を取り入れ、その予想を確かめる活動を設けることなども確率の意味を理解するための有効な指導と考えます。

数学B「主として活用に関する問題」の結果

領域ごとの調査結果については、すべてにおいて全国の平均正答率を上回っているものの、県の平均正答率との比較から、全体的に与えられた情報を適切に整理し、筋道立てて説明する力が不十分です。特に、「図形」領域について大きな課題があります。

今後の指導に当たっては、示された内容を証明するだけでなく、条件を読んだり証明を読んだりすることを通して、新たな性質を見出すことができるように指導することが大切です。

<中学校 数学B（領域）の正答率>



【構想を立てて証明し、証明を振り返ること】

証明を書くことができるようにするためには、証明を構想する活動を取り入れ、着目する性質や関係を明らかにすることが大切です。また、条件を変えたり、図を与えず題意に沿った図を書く活動を取り入れたりとしながら、発展的に考える機会を設けることが必要です。

【反例をあげて説明すること】

事柄が一般的に成り立つことを、文字式を変形して説明することについては成果が見られます。しかし、事柄が成り立たないことを説明する際に、反例を1つあげてそれを根拠とすればよいことについての理解が不十分です。反例の活用については、具体例を示しながら指導することが必要です。

質問紙調査から<数学の学習について>

数学の学習の仕方については、ほとんどの項目において、選択番号1(当てはまる)、2(どちらかといえば当てはまる)の合計が、全国を上回っているものの県よりも低い結果です。特に、「数学の勉強は好きですか」、「数学の授業の内容はよく分かりますか」については、全国よりも低い結果です。「授業の内容が分かる」ことが「数学の勉強が好き」に反映する授業づくりが必要です。そのためには、単元構想による指導と評価の具現化を図り、それを基に指導の視点を明確にした単位時間の指導を継続的に実践することによって、達成感や満足感を日常的に味わうことができるような指導の工夫改善を図ることが必要です。

一方、「普段の生活の中での活用」、「将来、社会に出たときに役立つ」の項目については、全国や県よりもよい結果です。様々な考え方のよさを多面的に味わったり、実感したりできる授業づくりを通して、さらに数学の有用性について啓発することが大切です。

児童生徒質問紙について

児童生徒の質問紙調査は、74項目に及び、学習習慣、生活習慣等幅広く質問されています。その中で注目すべき項目や今後に生かせる項目について抜粋し考察しました。

データは今年度の本市、県、全国の結果と平成22年度からの4年間（H23を除く）を比較したグラフを掲載しています。

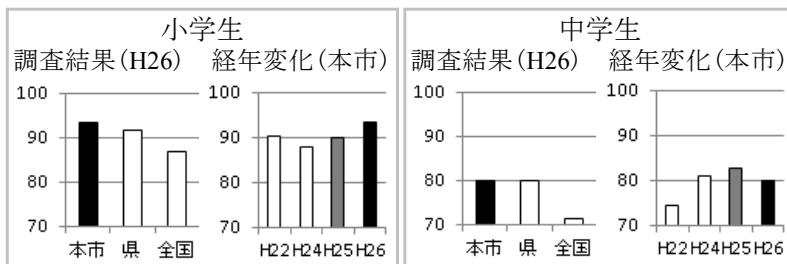
なお、この調査では本市の小学校6年生648名、中学校3年生701名が回答しています。

【将来の夢や目標を持っていますか】

《当てはまる、やや当てはまる割合》

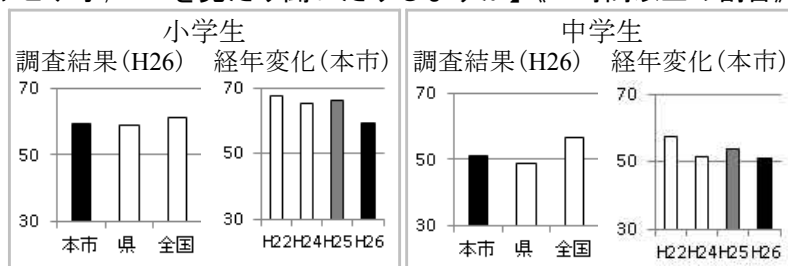
小学生の93.4%、中学生の79.9%が夢や目標を持っています。小学生は全国、県と比較して高い割合を示し、経年変化でも増加傾向にあります。児童が夢や目標を持ち努力していく姿勢が高まっていることは望ましい傾向と考えます。

中学生は昨年度より減少しましたが、全国と比較するとかなり高い割合を示しています。夢や目標を見出していない児童生徒に対しては、キャリア発達課題に応じた段階的指導を確実にを行うとともに、人との関わりを重視した体験的な活動を充実させるなどキャリア教育をより推進させることが望まれます。



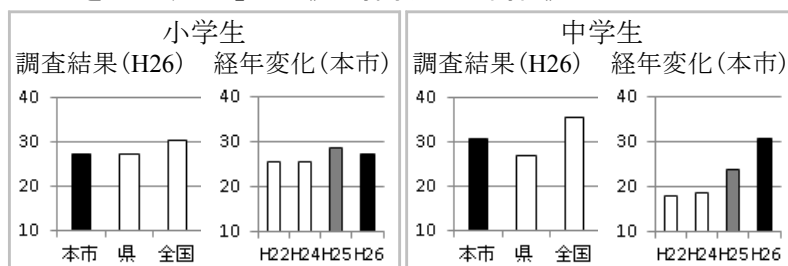
【普通日にどれくらいの時間テレビやビデオ、DVDを見たり聞いたりしますか】《2時間以上の割合》

本市の小学生の59.4%、中学生の51%が普通日に2時間以上テレビやビデオ、DVDを見たり聞いたりしていると答えています。2時間以上テレビゲームをする生徒が増加していることや家庭学習の時間が減少しているという現状からも、規則正しい生活リズムを身に付け、時間を有効に使うことができるよう、継続して指導していくことが必要であると考えます。



【普通日にどれくらいの時間テレビゲームをしますか】《2時間以上の割合》

普通日に2時間以上テレビゲームをしている本市の小学生の割合は、27.2%で昨年より減少しています。中学生の割合は、30.6%で、昨年より6.8ポイントも増加しています。県と比べても依然として高い割合を示しています。中学生が帰宅後、ゲームに費やす時間が年々増加する傾向にあります。テレビゲームの使用については、学校と家庭が連携を図りながら、適切な時間等の指導を継続していくことが望まれます。

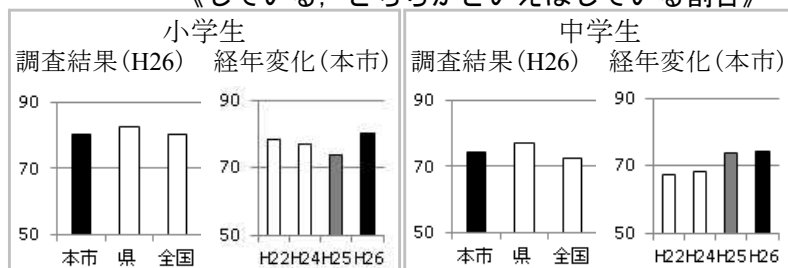


【家の人（兄弟姉妹除く）と学校での出来事について話をしていますか】

《している、どちらかといえばしている割合》

家の人と学校での出来事について話をしている児童生徒の割合は小学生82%、中学生74.4%です。小学生においては昨年度より8ポイント増加しましたが、全国とほぼ同じで県の割合を下回っています。中学生は昨年度とほぼ同じ数値ですが、県平均を下回る結果となっています。

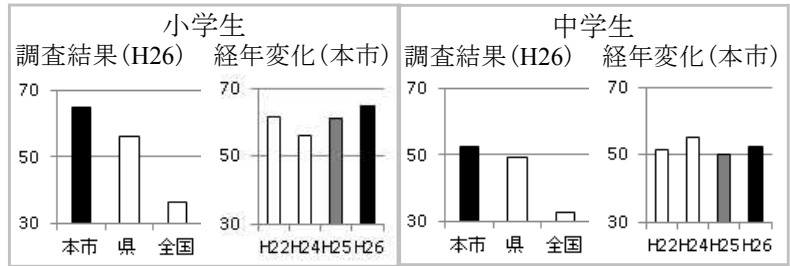
家庭においては、家族で過ごす時間を意識的に設けるなどして、受容的な姿勢で児童生徒に接することが望まれます。



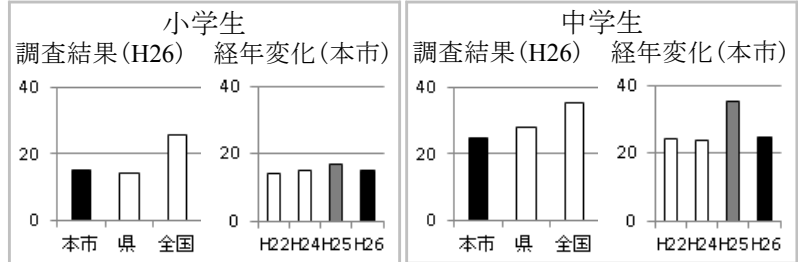
【学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか】
《1時間以上、2時間より少ないの割合》

学校以外で平日勉強している時間については、本市の小学生の65%、中学生の52.5%が1時間から2時間と答えています。

小・中学生とも、2時間以上じっくり取り組む割合は、全国に比べてかなり低くなっています。テレビやビデオ、ゲームに2時間以上費やす児童生徒の割合が高いという実態から、帰宅後の時間の有効な使い方や効率的な家庭学習の進め方等について、継続的な指導が求められます。



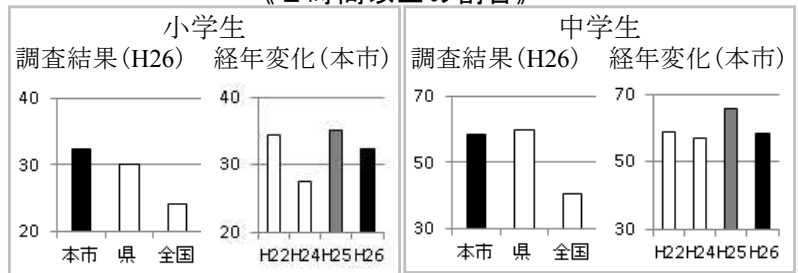
《2時間以上の割合(3時間以上を含む)》



【土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか】
《2時間以上の割合》

休日に2時間以上勉強している児童生徒の割合は、小学生の32.3%、中学生の58.6%で、小学校では県や全国平均を大きく上回っています。

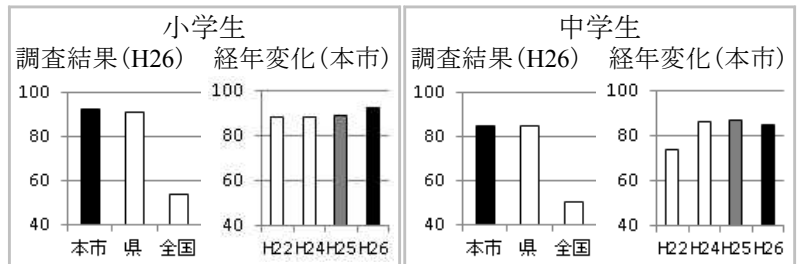
中学校でも、県平均はやや下回るものの全国平均を大きく上回る結果となっています。また、休日に勉強を全くしない児童生徒の割合は、全国約11%に比べて本市約1%と大幅に下回り、本市児童生徒は休日においても家庭学習の定着が図られていることがわかります。



【家で学校の授業の復習をしていますか】 《している、どちらかといえばしている割合》

家で授業の復習をしている児童生徒の割合は小学生が92%、中学生が84.4%で、全国に比べて小学生が38ポイント、中学生が34ポイント上回っています。「一人勉強ノート」の使用により、その日の学習内容を確実に定着させていることがうかがえます。

反面、予習をしている中学生の割合は35.2%で、全国とほぼ同じですが、県と比較すると8.4ポイント下回っています。中学生には、予習と復習の相乗効果が得られる効果的な学習が望まれます。



【家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか】

《している、どちらかといえばしている割合》

家で、自分で計画を立てて勉強をしている児童生徒の割合は、小学生81.6%、中学生63.6%となっており、増加の傾向にあります。学校においては、小学生では1週間程度、中学生では1ヶ月程度の家庭学習計画を立てさせるなどして、帰宅後、宿題以外の自主学習に計画的・継続的に取り組むことができるような指導が必要であると考えます。一人一人の取組に対して、日々の実行と成果を確認し、必要があれば修正するなど、児童生徒においても簡単なPDCAサイクルを機能させ、自主的に学習を進められるよう支援していくことが大切です。

